

平成 28 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 修士論文

視覚に障害のある児童・生徒の  
運動経験に関する検討

学籍番号 4114038

氏名 山本 夏幹

論文指導教員 牛尾 直行

研究指導教員 飯嶋 正博

合格年月日 平成 29 年 2 月 20 日

論文審査員 主査 大久保 菜穂子

副査 飯嶋 正博

副査 牛尾 直行

## 目 次

第1章 緒言.....	1
第2章 文献考証.....	3
第1節 視覚障害の概要.....	3
第2節 視覚障害児の身体の発育・発達.....	3
第3節 視覚障害児の運動機能の発育・発達.....	4
第4節 視覚に障害のある幼児・児童・生徒・学生の運動・スポーツ経験.....	4
第5節 視覚に障害のある幼児・児童・生徒に対する体育指導.....	5
第6節 視覚障害児と遊び.....	6
第7節 子どもの身のこなしを高める運動.....	6
第3章 研究目的.....	8
第4章 調査方法.....	9
第1節 調査手続き.....	9
第2節 調査対象者.....	9
第3節 調査期間・調査時間.....	9
第4節 質問項目の構成.....	9
第5節 倫理的配慮.....	10
第5章 結果.....	11
第1節 各生徒の調査結果.....	11
第2節 生徒Aの調査結果.....	14
第3節 生徒Bの調査結果.....	16
第4節 生徒Cの調査結果.....	19
第5節 生徒Dの調査結果.....	22
第6節 生徒Eの調査結果.....	25
第7節 各生徒の調査結果のまとめ.....	28
第6章 考察.....	32
第1節 視覚に障害のある子どもの身のこなしを高める運動.....	32
第7章 結論.....	35
第1節 結果.....	35
第2節 今後の課題.....	35
引用・参考文献.....	36
英文要約.....	38

## 第1章 緒言

2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定し、障害の有無に関わらず世間のスポーツに対する関心の高まりを感じる。とりわけ、障害者スポーツに関する情報を目にする機会は急増した印象がある。この流れに合わせて、2015年5月にパラリンピック競技団体の基盤整備や障害のあるアスリートが競技に集中するための環境整備、パラリンピックを通じたインクルーシブ社会の実現に向けた教育などを目的とする公益財団法人日本財団パラリンピックサポートセンターが設立された。パラリンピック種目競技団体への支援や世間の障害者観の変革など、多方面で影響を及ぼしている。

一方、パラリンピック種目ではない障害者スポーツも存在する。視覚障害に関していえば、視覚障害者用に工夫されている球技にフロアバレーボール、サウンドテーブルテニス、ブラインドテニス、グランドソフトボールなど、日本国内のみで広がっている種目も含めて、さまざまな種目が存在している。パラリンピック種目に関わらず、障害者がスポーツを親しむ文化は長い時間をかけて養成されてきた。

2016年4月より、障害の有無に分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障害を理由とする差別の解消を推進することを目的に障害者差別解消法が施行された。

障害者の権利に関する条約第24条によれば、学校教育現場で人間の多様性の尊重等の強化、障害者が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度まで発達させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであるインクルーシブ教育の推進を掲げている。

上記のような機運の高まり、障害者を取り巻く環境の変化などの影響を受け、障害を有している子どもを発掘、育成し、パラアスリートにまで押し上げようとする動きも活発である。しかし、視覚障害児の数は減少の一途を辿っている。平成27年度全国盲学校長会編「視覚障害教育の現状と課題」<sup>13)</sup>では、特別支援学校(視覚障害)に在籍する幼児・児童・生徒の数は平成16年度では3,873人だったのに対し、平成28年度では2,863人と約10年間で1,000人近くの視覚障害児が減少している。その背景には、少子化問題や医療技術の進歩などが考えられる。このように、非常に限られた人数からパラアスリートを発掘、育成していく過程は容易ではない。

筆者は現在、特別支援学校(視覚障害)の中高保健体育科教諭として勤務し、日々の活動を通じて、パラリンピック種目であるブラインドサッカーの指導を中心に行っている。体育実技では陸上競技、水泳、器械運動、フロアバレーボール、ゴールボール、サウンドテーブルテニス、ブラインドサッカーなどを指導している。このような日々の教育活動を通じて、視覚障害児の運動動作について感じたことがある。個人差はあるが、身のこなしがぎこちない生徒が多いことである。例えば、50mを走る時に腕が振れない生徒や膝があまり屈曲せずに足を運んでいる生徒、真っすぐ走れず左右に動きながら走ってくる生徒など、今までの経験ではあまり見ることのなかった動きのぎこちなさを感じるがあった。これは視覚障害そのものが要因であるのか、視覚障害を有することで引き起こされる行動の制限や視覚的模倣の欠如などから引き起こされる身体の不活動性や運動経験の不足が原因であるのか疑問を抱いた。

上記にもあるように、パラアスリートの発掘、育成と視覚に障害のある子どもの運動

やスポーツ動作の課題や身のこなしのぎこちなさについて検討することは、優秀なアスリートの育成のみならず、視覚に障害のあるすべての子どもにとっても身のこなしが良くなることによって生活の質の向上につながり、日常生活の中で自らが主体的に行動を起こせるようになるきっかけになり得るだろう。

従って、本研究は視覚に障害のある中学生に対し、児童期の運動やスポーツ活動経験の質・量などに関する聞き取り調査を行い、身のこなしのぎこちなさとの関連を検討することを目的とする。

また、上述の検討を通して視覚に障害のある児童・生徒の身のこなしのぎこちなさの要素を分析する。さらに、聞き取り調査をもとに身のこなしのぎこちなさがある生徒に対する個の実態に合わせた指導法の開発につなげたいと考えている。

## 第2章 文献考証

### 第1節 視覚障害の概要

視覚障害は、視機能の永続的低下の総称を指す。視機能は、視力、視野、色覚、暗順応、眼球運動などの各種機能から成り立っている。視覚障害にはさまざまな程度があり、見え方はさまざまである。視覚障害は大きく、盲 (blindness) と弱視 (partial sight) に分類される<sup>9)</sup>。

盲は、視覚を用いて日常生活を行うことが困難な者のことである。教育的には、普通文字による教育が概ね不可能で、点字を常用し、主として聴覚や触覚を活用した学習を行う必要のある者を指す。盲には、全盲 (視力0)、光覚 (光を感じることができる程度)、手動弁 (眼前の手の動きがわかる程度)、指数弁 (眼前の指の本数がわかる程度) などが含まれる。全盲は、早期全盲と後期全盲に分かれる。医学的には生まれつきの盲人を先天盲、生後失明したものを後天盲という。心理学的には視覚的経験の記憶の有無が問題になる。視覚的経験に関する記憶の有無と失明年齢との関係は個人差があったり、失明してからの経過年数などが関係している。一様ではないが、3歳から5歳くらいまでの失明は視覚的経験が残らないとされている<sup>10)</sup>。本論文では、5歳以前に失明した盲児を早期全盲、6歳以後に失明した盲児を後期全盲とする。

弱視は、視覚による日常生活は可能であるが著しく不自由な者のことである。教育的には、視覚による教育は可能であるが、文字の拡大などの特別な配慮が必要な者を指す。弱視の視力の程度は、矯正視力が0.02以上、概ね0.3未満である。弱視の見え方は、視野の周辺が欠けていたり、明るい所から暗い所に入ると見えにくくなるなど一人ひとり異なる<sup>9)</sup>。

学校教育法施行令第22条の3によれば、「両眼の視力が概ね0.3未満の者、又は視力以外の視機能障害が高度の者のうち、拡大鏡等の使用によっても通常の文字、図形等の視覚による認識が不可能又は著しく困難な程度の者」となっている<sup>9)</sup>。

### 第2節 視覚障害児の身体の発育・発達

人間の発育・発達における視覚の役割は大きく、視覚障害、特に盲という状態は人間の行動や事物の認知、環境の認知、概念形成などに影響を及ぼす。五十嵐<sup>9)</sup>は視覚障害が発育・発達に影響する要因を行動の制限、視覚的情報の欠如、視覚的模倣の欠如、視覚障害児に対する社会の態度の四つの観点でまとめている。運動やスポーツの動作の獲得を考えた場合も、視覚経験を有さないことによる影響が考えられる。鈴木ら<sup>12)</sup>は幼児期の視覚障害児の行動について、盲幼児の未知環境における行動の消極性を指摘している。佐藤<sup>9)10)</sup>はこのような乳幼児期における行動の制限は、身体発達や知的発達に影響を及ぼすことを述べている。人間は知識の80%を視覚によって得ているといわれており、低年齢であるほど視覚からの情報によって事物の具体的な概念形成をすることが多いため、視覚障害の影響が大きくなると述べている。また、視覚的模倣が不可能や困難な状態にある視覚障害児が日常生活に必要な動作や技術を習得が難しくなることを指摘している。これは、運動やスポーツの動作を獲得が難しいことも同様であろう。

低年齢から上記で示した影響を受けやすい視覚障害児の身体の発達は形態面の発育にも影響がある。発達初期における運動能力については山本・岩田ら<sup>23)</sup>の調査があり、

「1人で座る」が平均生後8ヶ月(晴眼児6ヶ月)、「1人歩き」が20ヶ月(晴眼児15ヶ月)と、かなりの遅れを示していることを明らかにしている。また、佐藤・中田<sup>11)</sup>による全国の盲学校児童生徒の身長、体重、胸囲、座高を横断的調査では、晴眼児に比べていずれの項目においても視覚障害児童生徒の形態値は低い水準にあることが明らかにされている。五十嵐<sup>3)</sup>は未熟児網膜症による失明児を除いて、身長、体重、胸囲、座高ともに、視覚障害児と晴眼児の間には差がないことを示している。しかし、盲学校小学部、中学部、高等部の児童・生徒については、身長、体重、胸囲のいずれの面でも、視覚障害児の方が遅れており、年齢が進むにつれて差が大きくなることを指摘している。

### 第3節 視覚障害児の運動機能の発育・発達

佐藤<sup>9)10)</sup>は視覚障害児の中には体力的に弱かったり、運動能力に遅れがあったりする者が多いことを指摘している。これは、視覚障害そのものが原因ではなく、視覚障害がもたらす行動の制限や視覚的情報の欠如などによる運動量の不足と運動経験の制限が影響していると述べている。視覚障害児の運動能力の遅れは幼児期から顕在化しており、年齢とともに増大することが指摘されている。また、視覚障害児は運動量が不足する上に、全力を出し切る運動をほとんど経験できないことも述べている。

中田<sup>17)</sup>による視覚障害児の反応時間の発達に関する研究では、音刺激に対して素早く指でボタンを押す指反応時間では、加齢に伴って視覚障害児も晴眼児も短縮するのに対し、音刺激に対して立位の状態から素早く前方40cmへ跳躍する全身反応時間では晴眼児の平均値と比較して大きな反応時間を要していることが指摘されている。これは、身体の巧みさで劣ることが原因であり、視覚障害児の運動経験の不足、トレーニング不足であることが考えられる結果であると述べている。

また、視覚障害児の身のこなしのぎこちなさについて、五十嵐<sup>5)</sup>は視覚障害児が平衡性、敏捷性、巧緻性、姿勢調整能などの調整能力の発達の遅滞が影響していることを指摘している。とりわけ、意識的または無意識的にその場の状況や目的に応じて、自由にかつ素早く、姿勢を変化させたり保持したりする姿勢調整能の未発達が身のこなしのぎこちなさに関与していると述べている。さらに、視覚障害児の姿勢を静的姿勢(きをつけ、礼、座位など)と動的姿勢(歩く、走る、スキップなど)に大別し、視覚障害児の動的姿勢に関して、身体全体の協応の下手さ、足の動きと手の動きの協応の下手さを指摘しており、これは身体各部位の脱力が上手にできないことが影響していると述べている。協応動作が苦手な視覚障害児は、幼児期からの学習の不足が原因の一つに挙げられることを述べている。また、佐藤<sup>10)11)</sup>は盲児の動作は不活動でぎこちなさであることを指摘しており、これは視覚的模倣ができないことが原因であることを述べている。晴眼児は視覚を通していろいろの動作を模倣するが盲児にはそれができない。話を聞いて動作・行動を学んだとしてもなんとなく不器用であったり、ぎこちなさがあったりしてしまうことを記している。

### 第4節 視覚に障害のある幼児・児童・生徒・学生の運動・スポーツ経験

佐藤<sup>9)</sup>は視覚に障害のある幼児の運動機能発達について、視覚的模倣ができない盲乳幼児の運動発達は視覚情報を得られないことによる影響についてまとめている。エイデルソンとフライバーグ<sup>1)</sup>は神経学的に正常な盲乳幼児を観察し、自発的な移動と歩行の

項目において遅滞が認められたことを報告しており、はいはいやつかまり立ち、歩行の開始時期が遅れることを示している。一方、田中・石川<sup>2)</sup>は知的に正常で、出生体重も標準以上の盲乳幼児はまったく運動発達に遅滞を示さないことを報告している。適切な保育指導がその背景にあること、つまり盲乳幼児に不足した発達刺激を与える環境を用意することによって晴眼児と同様の発達を示すことを示唆している。佐藤<sup>10)</sup>は視覚障害幼児の運動不足について、普通の幼稚園に通園していて、活動的に見える盲幼児でも、実際に万歩計などで運動量を測ると、視覚に障害のない幼児の3分の1程度の活動量しかないことを指摘している。

中田ら<sup>18)</sup>による視覚障害児の筋力についての報告では、13歳、14歳の晴眼児男子の身長、体重、握力、腕力、脚力、背筋力、垂直跳び、立ち幅跳びの平均値を100%とした場合、同年齢の盲学校児童生徒の平均値は身長、体重では歳はないが、握力から立ち幅跳びまでのそれぞれの項目の値は晴眼児の約80%を示している。つまり、形態面では差異はないが機能面で差異は生じることを示している。この理由について、運動経験の不足や視覚障害児の身体移動の不自由さが習慣化し、運動経験の質・量とも拡大しないことが問題であることを挙げている。

香田<sup>7)</sup>による一般の学校に通学していた視覚に障害のある学生に対する運動やスポーツ経験に関する調査では、体育実技の参加についてアンケート調査を実施し、視覚障害のために授業を一部、または全部見学したことがある弱視の生徒は中学で21%、高校では32%存在していたことを報告している。特に球技種目を見学していた生徒が多数を占めていたことを指摘している。

#### 第5節 視覚に障害のある幼児・児童・生徒に対する体育指導

幼児への運動遊びの工夫と援助について五十嵐<sup>5)</sup>は大人が参加して補助をすること、器具・遊具を工夫することなどで直接的、間接的に補助をすることを指摘している。直接的補助では、大人が子どもの遊びの手がかりを補助する、発達段階に合わせた遊び方を教える、新しい遊具を使う時にその遊び方を教える、探している遊具の場所を教える、楽しい言葉がけなどを挙げている。間接的補助では、目標となる地点に音源を置く、ボールに音が出る工夫をする、広い場所を確保する、危険を除くことなどを挙げている。また、遊ぶ場所の中心にラジオカセットなどの音源を置き、その音が聞こえる範囲の中で遊ぶことや地面に太い縄を置き、その範囲の中で遊ぶことなどで環境を整えることも挙げている。

また、五十嵐<sup>4)</sup>の視覚障害幼児の体育指導に関する研究では、長期的な体育指導によって視覚に障害のある児童生徒の体力・運動能力指数の向上が認められたことが報告されている。

原田<sup>19)</sup>は視覚に障害のある子どもに対する体育指導に関して、発達段階に合わせた指導をすること、分習法により基礎から指導すること、補助により動きを指導すること、触らせて理解させる動きを指導することを挙げている。また、指導上の配慮について、フィードバックの重要性、リズムを指導の手段に取り入れること、具体的な指示語で示すこと、教材・教具を工夫することを挙げている。さらに、安全に対する配慮では、緊張感・集中力を維持すること、環境の整備をすること、明確な指示をすること、ボールの渡し方などに注意する必要があることを示している。

## 第6節 視覚障害児と遊び

視覚障害児と遊びについて佐瀬<sup>8)</sup>は全国の盲学校の高等部、別科、専攻科に通う生徒を対象に遊びに関する調査をした。遊ぶことが好きな視覚障害児・者は全体で74.1%存在しており、半数以上の者は好きと答えている。しかし、嫌い、好きでも嫌いでもないと回答したものは合わせて25.9%存在しており消極的な姿勢も目立つことが指摘されている。よく遊ぶ内容は音楽を聞く、ラジオを聞く、話し合い、ハイキング、野球という順であり、動的な遊びが少ないことを指摘している。遊ぶ時は一人が良いか友達と一緒に良いかという項目では、18.2%は一人が良いと答えている。47.1%は友達と一緒に良いと答えている。

## 第7節 子どもの身のこなしを高める運動

視覚に障害のない児童でも近年、「動きがぎこちない」、「ぎくしゃくしている」などといった子どもが増えていることがと各教育現場で叫ばれている<sup>15)</sup>。その背景には、運動する機会や場所の減少と運動に充てる時間の減少といった子どもを取り巻く環境の変化が影響している。このような現状を改善する方法として「コーディネーション運動」の導入が効果的であることが述べられている。コーディネーション運動を取り入れることでコーディネーション能力の向上を目指す。コーディネーション能力とは、運動全体のイメージを把握する能力、リズムやタイミングを正確に把握する能力、回転をしてバランスを保つ能力の総称を指す。コーディネーション能力は定位能力（相手やボールなどと自分の位置関係を正確に把握する能力）、変換能力（状況に合わせて、素早く動作を切り替える能力）、連結能力（関節や筋肉の動きを、タイミングよく同調させる運動）、反応能力（合図に素早く、正確に対応する能力）、識別能力（手や足、用具などを精密に操作する能力）、リズム能力（動きを真似したり、イメージを表現する能力）、バランス能力（不安定な体勢でもプレーを継続する能力）の7つの項目から形成される。これらの能力をバランスよく向上させることが身のこなしのぎこちなさの改善につながる。

さらに、視覚に障害のない幼児の運動やスポーツ、体を使った遊びについて文部科学省の幼児期運動指針<sup>20)</sup>にまとめられている。現代の幼児の運動能力、体力の低下は都市化や少子化が進展し、社会環境や人々の生活様式を大きく変化させ、子どもにとって遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少などが遊ぶ機会の減少を招いていることを示唆している。幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の障害にとどまらず、意欲や気力の減弱、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことも懸念されている。

幼児期に獲得すべき基本的な運動として、立つ、座る、寝転ぶ、などの「体のバランスをとる動き」、歩く、走る、跳ねるなどの「体を移動する動き」、持つ、運ぶ、投げるなどの「用具などを操作する動き」の三つに分けられる。さらに、これらの動きを日常生活や体を使った遊びなどの様々な経験の中で、基本的な動きの種類を増大させていく「動きの多様化」、すなわち獲得する動きの種類を増大と、それぞれの基本的な動きの運動の仕方（動作様式）がより合理的・合目的的になり、動きが上手になっていく「動きの洗練化」、つまり基本的な動きの質的な変容という二つに分けられる。「動きの洗練



化」とは、年齢とともに様々な運動を経験し動き方がうまくなり、質的に改善されていくことである。3歳から4歳では、動きに「力み」や「ぎこちなさ」がみられるが、年齢とともに、無駄な動きや過剰な動きに伴う未熟な動きが減少し、目的に合った合理的な動きによる滑らかな運動や動きの組み合わせが成立するようになる。

また、幼児期運動指針では、多様な動きを経験できるようにさまざまな遊びを取り入れることが推奨されている。特に幼児期は運動機能が急速に発達し、体の基本的な動きを身につけやすい時期とされている。

### 第3章 研究目的

本論文は視覚に障害のある中学生に対し、児童期の運動やスポーツ活動経験の質・量などに関する聞き取り調査を行い、身のこなしのぎこちなさとの関連を検討することを目的とする。児童期の運動、スポーツ活動経験の質や量とは、具体的には、児童期の体育や外遊びの経験、全力を出し切る経験などについてである。

また、上述の検討を通して、視覚に障害のある児童・生徒の身のこなしのぎこちなさの要素を分析する。さらに、聞き取り調査をもとに、身のこなしのぎこちなさがある生徒に対する個の実態に合わせた指導法の開発につなげたい。

## 第4章 調査方法

### 第1節 調査手続き

昼休みや放課後を利用して、半構造化面接調査を実施した。面接調査は、T大学附属視覚特別支援学校の教室を利用し、他の生徒が出入りしないように配慮した。

また、毎年4月に所属校で実施している「新体力テスト」の結果と普段の体育実技や運動クラブの様子をもとに、対象生徒の身のこなしを五十嵐<sup>5)</sup>の「平衡性、敏捷性、巧緻性、協応性、柔軟性」の5つの観点から5段階で評価を行った。

### 第2節 調査対象者

T大学附属視覚特別支援学校中学部に所属し、視覚の状態が全盲または光覚の生徒5名（男子:3名、女子:2名）とした。なお、5名とも視覚障害単一の生徒である。

### 第3節 調査期間・調査時間

調査は2016年10月～11月に実施した。各生徒の聞き取り調査に要した時間は1時間程度である。

### 第4節 質問項目の構成

#### (1) フェイスシート

性別、年齢、生年月日、学年、身長、体重、現在の視力、現在の視力になった時期、聴力、児童期の学校種、主な通学方法、単独歩行<sup>1)</sup>について、運動やスポーツに対する態度についての質問。

#### (2) 体育について

授業の形式や内容（児童の数、教員の数、年度の4月から3月までの内容）、体育実技への参加状況、印象に残った体育の内容について小学校低学年と高学年の大きく二つの時期に分けて聞き取りを行った。

#### (3) 外遊びについて

外遊びをする頻度、誰とどんな遊びをすることが多かったか、怪我の経験の有無などについて小学校低学年と高学年の大きく二つの時期に分けて聞き取りを行った。

#### (4) 体育や外遊び以外（社会体育等）で体を動かす経験

学外で体を動かす機会があったか、誰とどのような運動やスポーツをしていたか、日常生活の中で一人で外出することがあったかについて小学校低学年と高学年の大きく二つの時期に分けて聞き取りを行った。

---

<sup>1)</sup> 学校敷地内での歩行の感覚について問うた。対象の生徒は、学校敷地外の歩行では白杖を使用して歩行しているが、学校敷地内の歩行では白杖を使用せずに歩行することがある。

- (5) 放課後や休日の過ごし方について  
運動する機会があったか、どのような運動やスポーツをしていたかについて小学校低学年と高学年の大きく二つの時期に分けて聞き取りを行った。
- (6) 全力を出し切る経験について（学年は問わない）  
(1) から (5) で運動やスポーツに取り組む中で「自分自身が全力を出し切った」と思える経験、全力を出せた環境（場所）、誰かと一緒に経験したかについて聞き取りを行った。
- (7) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について（学年は問わない）  
走る・投げる・跳ぶなどの動作を理解する経験、練習方法、理解したと感じられたのはなぜかについて聞き取りを行った。
- (8) 運動やスポーツへの意識（中学部現在）  
運動やスポーツをするときに怖さはあるか、新しい動き（動作）を教わった時にすぐに理解できるか、新しい動きや運動、スポーツに挑戦することは楽しいと感じるかについて聞き取りを行った。

なお、質問項目の(2)体育について～(5)放課後や休日の過ごし方についてまでは、主にどのような環境でどれくらい運動やスポーツを経験してきたかといった「量」を問い、(6)全力を出し切る経験～(8)運動やスポーツへの意識までは、主に具体的な経験(エピソード)を問う。

#### 第5節 倫理的配慮

本研究は、順天堂大学スポーツ健康科学研究等倫理審査会により承認を得たものである。

対象者には本研究の概要、調査による個人情報管理されていること、面接調査に応じることは任意であること、面接調査開始後に、継続が困難になった場合は、いつでも面接調査を中止できることを十分に説明した。また、対象者が未成年であるため、保護者へ本研究の概要と質問項目を説明し、同意を得た上で面接調査を実施した。

## 第5章 結果

### 第1節 各生徒の調査結果

#### (1) フェイスシートと身のこなしの評価の結果

表1、2、3はフェイスシートの一部抜粋である。

表4、5は新体力テストの結果、表6は身のこなしの評価である。新体力テストの実施項目は「握力(左右平均)、上体起こし、長座体前屈、50m走、立ち幅跳び、ハンドボール投げ、バーピーテスト」の7項目から構成されている。これらの記録と普段の体育実技などの様子を合わせて5段階で評価した。

a) 生徒Aのフェイスシート結果：歩行に関しては小・中学部ともに単独で外出することはなかった。歩行時の感覚については、「僕たちは見えないのが普通だから(音を)頼りにしているとかでなく、なんとなく歩いているとしか答えられない。壁とか触らなくても歩けるし。」という回答が得られた。

b) 生徒Aの身のこなしの評価：生徒Aは普段の体育実技に積極的に取り組み、運動やスポーツに対する関心や意欲は高い(表3参照)。基本的な運動である「走る」・「投げる」・「跳ぶ」といった動きに関しても比較的上手に自身の体を操作しており、特に敏捷性にあたる「跳ぶ」の能力は他4名の生徒と比べても高い水準である(表4参照)。

c) 生徒Bのフェイスシート結果：歩行に関しては小・中学部ともに単独で外出することはなかった。歩行時の感覚については、よくわからないという回答だった。

d) 生徒Bの身のこなしの評価：生徒Bは普段の体育実技に積極的に取り組み、運動やスポーツに対する関心や意欲は高い(表3参照)。基本的な運動である「走る」・「投げる」・「跳ぶ」といった動きに関しては、普通にこなせる程度の習得をしている。体の柔軟性は高いが、動作はぎこちなくなることが見られる。例えば、ボールを蹴る時に蹴り足の膝を曲げずに後方へ引き、その状態から蹴る動作に入ってしまったたり、支持脚の膝に“遊び”がなかったりするところがある。全体の動きは「蹴る」動作になっているが、詳細に見ていくと手足を協応させて動かしたりすることや片足で立つときにバランスを保つことなどに難しさを感じるようである。このように動的な柔軟性に欠ける部分がある生徒である。

e) 生徒Cのフェイスシート結果：歩行に関しては小・中学部ともに単独で外出することはなかった。歩行時の感覚については、校内の歩行に関して「基本的に壁をつたってドアの枚数を数えたり、壁についている細い棒みたいなやつを数えて歩いています。」という回答が得られた。

f) 生徒Cの身のこなしの評価：生徒Cは普段の体育実技には積極的に取り組んでいるが、運動やスポーツは不得意と感じており、生涯を通して運動やスポーツを実施したいとは考えていない(表3参照)。陸上競技の「走る」やフロアバレーボールの「打つ」といった動作への理解力は良いが身のこなしのぎこちなさが残る生徒である。聞き取りでも「動いていく中でイメージをつかめる」という発言があり、理解はしているが「難しいな」と思うことも多いようである。普段の授業や部活動の様子から、教わった動きを忠実に再現しようと繰り返し取り組むことのできる生徒である。新体力

テストの長座体前屈の結果(表 5)からもわかるように、柔軟性は高いが一つひとつの動作をつなげて一つの動きを作ることは苦手なようである。

g) 生徒Dのフェイスシート結果：歩行に関しては小・中学部ともに単独で外出することはなかった。歩行時の感覚については、「一番使ってるのは空間感覚じゃないかな」という回答が得られた。さらに、空間感覚について「音の響きとか。例えば階段のどこに行くと“開けた”とかそんな感じのこと。」という回答が得られた。

h) 生徒Dの身のこなしの評価：生徒Dは普段の体育実技に積極的に取り組み、運動やスポーツに対する関心や意欲は高い(表3参照)。生涯を通して運動やスポーツに取り組みたいという気持ちもある。身体・運動能力はクラスで一番良い水準にあり、中学部全体で見ても同様である。新たな動作を指導しても素早く自身の体に落とし込むことができている。上手く脱力させながら各種動作を行えるため、身のこなしも滑らかである。

i) 生徒Eのフェイスシート結果：歩行に関しては小・中学部ともに単独で外出することはなかった。歩行時の感覚については、「(校内の)曲がり角のところで足触りが変わって、それで(曲がるところが)わかる。」という回答が得られた。さらに、「給食から帰ってくる時(屋外から屋内に入る時)に少しずれちゃうと左にずれたのか右にずれたのかわからなくなった時に手ばたきをしてどっちの方に響くとかで『左にずれたんだな』とかがわかる。」という回答が得られた。

j) 生徒Eの身のこなしの評価：生徒Eは普段の体育実技に積極的に取り組み、運動やスポーツに対する関心や意欲は高いが得意と感じている運動とそうでない運動がある(表3参照)。運動やスポーツの動作は普通にこなせる程度の能力を有している。児童期にバランスよくさまざまな種目を経験してきていることが影響していると考えられる。しかし、身体各部位を連結させて大きな動きを表現することが難しく、身のこなしにぎこちなさが残る生徒である。

表 1. フェイスシートの一部抜粋①

	性別	年齢	学年	身長	体重	現在の視力	失明時期	聴力	小学校の学校種
生徒A	男	14歳	2年生	162cm	48kg	(後期)全盲	小学2年生	異常なし	特別支援学校 ※小学2年生から
生徒B	女	13歳	2年生	160cm	45kg	(前期)全盲	生後6か月前後	異常なし	特別支援学校
生徒C	女	13歳	2年生	155cm	43kg	(後期)全盲	小学3年生	異常なし	特別支援学校
生徒D	男	13歳	1年生	155cm	37kg	(前期)全盲	3歳前後	異常なし	特別支援学校
生徒E	男	13歳	1年生	150cm	41kg	(前期)全盲	3歳前後	異常なし	特別支援学校

表 2. フェイスシートの一部抜粋②

	所属	通学方法	寄宿舎利用
生徒A	小学部	小5まで車通学, 小6から電車通学	小5から利用 ※不定期
	中学部	徒歩	利用
生徒B	小学部	徒歩	否
	中学部	徒歩	利用
生徒C	小学部	電車とスクールバスを利用	否
	中学部	徒歩	利用
生徒D	小学部	小5まで車通学, 小6から寄宿舎利用	小6から利用
	中学部	徒歩	利用
生徒E	小学部	電車とスクールバスを利用	否
	中学部	電車通学	否

表 3. フェイスシートの一部抜粋③

	好き/嫌い	得意/不得意	楽しい/楽しくない	続けたい/続けたくない
生徒A	好き	どちらでもない	楽しい	どちらかという続けたい
生徒B	どちらかという好き	どちらかという得意	楽しい	続けたい
生徒C	どちらかという好き	不得意	楽しい	続けたくない
生徒D	好き	得意	楽しい	続けたい
生徒E	好き	どちらでもない	楽しい	どちらかという続けたい

表 4. 新体力テストの結果①

	学年	握力 (敏)	上体起 (敏)	50m走 (平・敏・協)	立幅跳 (敏・巧・協)
生徒A	中1	21.8	27	9.58	174
	中2	25.0	31	8.46	195
生徒B	中1	24.1	18	10.57	102
	中2	27.7	18	9.98	125
生徒C	中1	21.6	20	12.49	120
	中2	22.1	18	11.85	130
生徒D	中1	24.7	36	9.03	185
生徒E	中1	21.3	14	12.47	135

表 5. 新体力テストの結果②

	学年	長座 (柔)	ハンド投げ (巧・平)	バーピー (敏・巧・協)
生徒A	中1	33	10	7
	中2	39	9.5	7
生徒B	中1	38	6	6
	中2	41	6	5
生徒C	中1	36	4	6
	中2	44	4.5	5
生徒D	中1	36	13	7
生徒E	中1	20	7	6

表 6. 各生徒の身のこなしの評価

	平衡性	敏捷性	巧緻性	協応性	柔軟性
生徒A	5	5	4	4	3
生徒B	3	3	4	3	4
生徒C	2	2	2	3	4
生徒D	5	5	5	4	4
生徒E	2	2	3	3	2

## 第2節 生徒Aの調査結果

### (1) 体育について

a) 低学年の体育について：主に小学2、3年生の頃の経験を中心に聞き取りを実施した。授業には全部参加していた。週3回の実技に加え、低学年の頃は（小学2年生まで）1時間目の半分くらいの時間を使って体づくり運動を実施していた。児童の数は7名で、教員の数は5名程度だった。授業の実施状況は、小学1年生から小学6年生まで合同で実施していた。1名の教員が全体へ指示を出し、その他の教員が児童一人ひとりに個別指導を行うティームティーチング（以下、T.T）を採用していた。授業の内容は以下の通りである。

4月：体力テスト・運動会練習	5月：運動会練習	6月：運動会練習・50m・ボール投げ
7月：水泳	9月：フロアバレーボール	10月：持久走・体力テスト
11月：体力テスト	12月以降：不明	

特に印象に残っている内容は、フロアバレーボールの授業であった。球技は好きだったが、授業で実施する機会が少なく、もっと機会を増やしてほしいと語っていた。なお、フロアバレーボールのルールは正式なルールではなく、学校独自のルールで実施していた。

b) 高学年の体育について：主に小学6年生の頃の経験を中心に聞き取りを実施した。授業には全部参加していた。週3回の実技のみで、低学年の頃に行っていた体づくり運動は行わなくなった。児童、教員の数は変わらず、実施状況も変わらなかった。内容も変更はなかった。特に印象に残っている内容は、球技をやっていたことが頭に残っているようだった。

### (2) 外遊びについて

a) 低学年の外遊びについて：主に小学2、3年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。毎日、昼休みの時間に外で遊んでおり、鬼ごっこをすることが多かった。友達や教員も入りながら遊んでいた。

b) 高学年の外遊びについて：主に小学6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。低学年の頃と同様に毎日、外で鬼ごっこをしていた。また、怪我についての経験では、転んだり物にぶつかったりすることはあったが、それによって遊ぶことへの恐怖心を抱くことはなくむしろ、「遊んでて怪我することなんて当たり前と思っていた。」という回答が得られた。

### (3) 体育や外遊び以外（社会体育等）で体を動かす経験

a) 低学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学2、3年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。クラブ活動や社会体育で体を動かす機会は少なく、主に学校の昼休みを利用して体を動かすことだけであった。

b) 高学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学5年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。学校の施設を利用して実施されていた月1回程度ブラインドテニス教室に通っていた。競技団体から派遣された指導者が指導をする教室であった。それ以外では特にないという回答だった。



(4) 放課後や休日の過ごし方について

a) 低学年の放課後や休日の過ごし方について：小学低学年では放課後や休日に体を動かす機会はほとんどなかった。家族や友人とスポーツなどで遊ぶこともなかった。

b) 高学年の放課後や休日の過ごし方について：小学高学年でも低学年と同様に体を動かす機会はほとんどなかった。

(5) 全力を出し切る経験について

体育の授業に校庭で実施された陸上運動の短距離走（50m 走）でタイムを計測する時に全力を出し切れたと感ずることができた。生徒 A は「50m 走のタイムを上げることを結構努力してて、タイムを更新できたときは結構嬉しかったです。」と語っており、誰かと競走して勝つことに執着していたわけではなく、自己新記録を出すことに喜びを見出していた。それは、誰かと競い合っていたから全力を出せたのかという問いに対し「いいえ。自分のタイムと戦っているような感じ。」と回答したことからもわかる。

(6) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について

陸上運動の短距離走の指導の中で速く走るポイントを指導してもらった時に自身でコツを掴むことができた体験がこの経験になったと語っていた。コツを掴むためには繰り返し練習を行ったことや自身の感覚と計測したタイムを照らし合わせてタイムが向上していたらコツを掴んだと理解していたようであった。

(7) 運動への意識調査

運動やスポーツをすることに恐怖心はない。新しい動きを教わる時にすぐに動きを理解（イメージ）できるかという問いに対しては、イメージはできているという回答だった。新しい運動やスポーツに取り組むことは楽しいかという問いに対しては、「楽しいと思う。はじめてやることだし、ちょっと挑戦したいと思えるから。」という回答が得られた。

### 第3節 生徒Bの調査結果

#### (1) 体育について

a) 低学年の体育について：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週3回実技を実施していた。児童の数は18名で教員は9名程度だった。授業の実施状況は、小学1年生から小学6年生までと重複障害学級と合同で実施していた。1名の教員が全体へ指示を出し、その他の教員が児童一人ひとりに個別指導を行うT.Tを採用していた。授業の内容は以下の通りである。

4月：体力テスト	5月：体力テスト・運動会練習	6月：体力テスト・水泳
7月：水泳	9月：水泳	10月：器械運動（マット・跳び箱・鉄棒）
11月：フロアバレーボール	12月：フロアバレーボール	1月：フロアバレーボール
2月：持久走	3月：縄跳び	

特に印象に残っている内容は、フロアバレーボールの授業であった。小学2年生のフロアバレーボールの授業で当時小学6年生の児童の中に得意な児童がおり、その児童と一緒に練習していたことをよく覚えていると語っていた。ルールは学校独自のものを採用していた。また、小学1年生から小学6年生まで一緒にフロアバレーボールを実施している時に、力の差を感じて怖くなることはなかったかという問いに対し、「ありました。（自分が）2年生のころとか特に、前に6年生の人とかいと怖くて逃げてました。」という回答が得られた。

低学年の時にもっと自転車や一輪車、ホッピングなどを練習したかったと語っていた。

b) 高学年の体育について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週3回実技を実施していた。児童の数は13名に減り、教員の数は10名に増えた。実施状況は変わらなかったが、内容は4月にラジオ体操の練習と5月にダンスの練習が加わった。ラジオ体操の練習は2単位時間程度であった。ダンスの練習は運動会に向けての練習であった。

特に印象に残っている内容は、フロアバレーボールの授業であった。低学年の時は高学年との力の差を感じていたが、「（自分が）6年生くらいになると、前に強い人が来てもやる気がでた。」という回答が得られた。

高学年の時も低学年の時と同様に自転車や一輪車、ホッピングなどの練習をしたかったと語っていた。

(2) 外遊びについて

a) 低学年の外遊びについて：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。毎週火曜と木曜の昼休みは小学5、6年生の児童と一緒に屋内のプレイルームでトランポリンをして遊ぶことが多かったと語っている。教室からプレイルームまでは一人で移動していた。

b) 高学年の外遊びについて：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。ほぼ毎日下校前のスクールバスを待つ15分間くらいを使って同級生（男子弱視1名、女子全盲1名）と芝生の中庭で鬼ごっこをすることが多かったと語っている。時々、教員も混ざりながら遊んでいた。芝生の中庭であったため「芝生だったのでこけても痛くなかったです。」と語っていた。

(3) 体育や外遊び以外（社会体育等）で体を動かす経験

a) 低学年、高学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：小学1年生から小学6年生までの6年間、学校で開催される水泳教室に通っていた。また、不定期であるが家族で河川敷に出かけて鬼ごっこやボール投げをして遊んでいた。水泳教室は夏休み期間の7月から8月にかけて2週間程度開催され、2時間泳ぎの練習をすることができた。河川敷については「（どれだけ走っても大丈夫と）わかってました。広い芝生だったので。」という言葉にも表れているように環境把握はできていた。

(4) 放課後や休日の過ごし方について

a) 低学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学1、2年生の頃の経験を聞き取りを行った。低学年の時は、室内で読書をする事が多く、体を使った遊びなどをする機会は少なかった。

b) 高学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。毎週月曜日の放課後は寄宿舍へ遊びに行き、16時から17時の1時間くらいを使って寄宿舍の柔道場で転がしドッジボールなどをして遊んでいた。走り回りながらボールを当てあっていた。環境把握に関して、「柔道場は広いので、感覚をつかめるとボールからくるくと逃げ回ることもできたのでそういう感じで遊んでいました。」と語っていた。

(5) 全力を出し切る経験について

小学6年生の時に、中高のフロアバレーボールクラブに混ざって一緒に練習をしていた時に全力を出し切れたことがあったと語っていた。クラブは週1、2回練習をしていて、生徒Bは担任の都合がつく日にクラブへ参加していた。生徒Bは「小学生のバレーとは違って、正規のルールでやるのですごく新鮮でした。（中高生の）ボールは強いんですけど、すごく楽しかったです。」と語っていた。

(6) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について

小学5、6年生の運動会のダンス練習で「(運動会の)ダンスの時の動きの指導をされた時に、先生に手首を持ってもらって動きを教えてもらった。教えてもらったあとは何となく感覚をつかんで、その後、曲に合わせて動いてみて手直しをしてもらったりとか、自分で『こうなんだな』と理解をします。」と語っていた。動きの理解のきっかけは、教員と一緒に動くことで動作のイメージができあがったようである。しかし、「イメージはつくんですけど、幅とかみんなに合わせないといけないときに実体験でやった方が『ああ、こうなんだな』とわかります。」と語っており、イメージと実際の動きを自身の感覚で合わせながら教員などのフィードバックも参考にして繰り返し練習することも重要と考えていた。

(7) 運動への意識調査

体育の授業で扱う範囲の運動やスポーツで恐怖心を感じることはない。新しい動きを教わる時にすぐに動きを理解(イメージ)できるかという問いに対しては、大体のイメージはできているという回答だった。動きのイメージに関しては「自分の頭の中で立体の想像図ができるのでどうやって動くか何となくシミュレーションします。」と語っていた。新しい運動やスポーツに取り組むことは楽しいかという問いに対して「球技系は楽しいですね。苦手な動きもシミュレーションはできるけど嫌ですね。」と語っていた。

#### 第4節 生徒Cの調査結果

##### (1) 体育について

a) 低学年の体育について：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週2回実技を実施していた。児童の数は16から18名で教員は10名程度だった。同級生は3名だった。授業の実施状況は、小学1年生から小学6年生までと小学3年生まで肢体不自由児と合同で実施していた。1名の教員が全体へ指示を出し、その他の教員が児童一人ひとりに個別指導を行うT.Tを採用していた。授業の内容は以下の通りである。

4月：基本的な動きの練習（体づくり運動）	5月：体を使った遊び	6月：マット運動
7月：水泳	9月：水泳	10月：体育祭練習・陸上運動
11月：トランポリン・サウンドテーブルテニス	12月：ローラーブレード	1月：ローラーブレード
2月：ローラーブレード	3月：ローラーブレード	

基本的な動きの練習では、もも上げ走やスキップなどの動きづくりを中心とした運動の時間だった。体を使った遊びでは、とうりゃんせやはないちもんめなどの遊びを実施していた。

特に印象に残っている内容は、体を使った遊びの授業であった。生徒Cは「車いすの子とかも交えて、列になってとうりゃんせをやったことがすごく印象的でした。車いすの子もそうでない子も楽しめるような体を使った遊びをやったときが楽しかったからだと思います。」と語っていた。

生徒Cは「トランポリンをやったんですけど一人ずつ回しながらやるので、あんまり番が回ってこなくてもっとやりたかったなと思います。」と語っていた。トランポリンの台数が限られており、複数回練習をする機会を確保することが難しい現状があったようである。

b) 高学年の体育について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週2回実技を実施していた。児童の数は16から18名で教員は10名程度だった。同級生は2名だった。授業の実施状況は、小学1年生から小学6年生まで合同で実施していた。指導形式に関しては、低学年の時と同様であった。授業の内容は一部変更が加えられていた。

5月：鉄棒・跳び箱	6月：フロアバレーボール	1月：体力テスト
-----------	--------------	----------

特に印象に残っている内容は、鉄棒の授業であった。生徒Cは「私、あまり鉄棒好きじゃなかったんですけど、逆上がりの練習をしていて全然上がれなくて。5年生のときは全然上がれなくて6年生でちょっと（5年生の時より）できるようになったのが心に残ってますね。」と語っていた。

##### (2) 外遊びについて

a) 低学年の外遊びについて：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。週2、3回業間休みと昼休みの時間に同級生と一緒に学校の中庭で箱型ブランコやジャングルジムを使って遊ぶことが多かったと語っていた。怪我をすることはなかった。

b) 高学年の外遊びについて：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。高学年になると業間休みや昼休みの時間を使って外遊びをすることはなかった。

(3) 体育や外遊び以外（社会体育等）で体を動かす経験

a) 低学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。家の近くの公園でブランコや滑り台を使って遊ぶことがあった。家族と遊ぶことが多く、週2、3回の頻度で遊んでいた。

b) 高学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。高学年になると体育や外遊び以外で体を動かす機会はなかった。

(4) 放課後や休日の過ごし方について

a) 低学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。放課後や休日の時間を使って運動やスポーツをする機会はなかった。

b) 高学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。小学6年生の時に2回アイススケートをしたことがある程度と語っていた。体育の授業でローラーブレードをすることがあったため、アイススケートも非常に楽しかったと語っていた。

(5) 全力を出し切る経験について

小学4、5年生の時の体育の授業のローラーブレードで全力を出し切れたと語っていた。場所は体育館であった。生徒Cは「3年生ぐらいの時はただ前に滑るだけやスピードをつけるだけだったんですけど、4年生から技（バックやひょうたん滑り）を取り入れ始めたので。」と語っており、授業の内容が低学年に比べ発展し、挑戦できる課題に取り組めたことが影響しているようであった。また、「最初は怖かったので、真ん中にマットがひいてあって歩く練習とかができるんですけど、それを一からちゃんとやってすべる練習になって、バックとかの練習もやりだしたので。」や「（ローラーブレードを）やる前に履いていない状態でやり方を説明してくれて、その状態で一回それをやる、ということをしてくれたからかなと思います。」と語っているように、段階的な指導方法で実施していたことも全力を出し切れたことにつながっているようである。

(6) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について

(5)と同様、小学4、5年生のローラーブレードの授業でこの経験をした。生徒Cは「新しいことをやるときは、最初の何分かはみんなで（ローラーブレードを）つけないでやる。できるかできないかは置いといて紹介をして、その後個人で練習みたいな感じでした。」と語っていた。また、新しいことに挑戦することが楽しいと思えたことも、意欲的に取り組めた要因の一つとして挙げられることを語っていた。

#### (7) 運動への意識調査

運動やスポーツをすることに恐怖心はない。新しい動きを教わる時にすぐに動きを理解（イメージ）できるかという問いに対しては、「動きを説明してもらって、実際に動いていく中で『あ、そういうことか』ということはあるんですけど。水泳とかは特にそうです。」と語っており、言葉だけの説明では理解しにくい部分がある。新しい運動やスポーツに取り組むことは楽しいかという問いに対して「楽しいなと思えることもあるし、やっぱりまだちょっと難しいなと思うこともあります。」と語っていた。

## 第5節 生徒Dの調査結果

### (1) 体育について

a) 低学年の体育について：主に小学1、2年生の頃を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週3回の実技を実施していた。児童の数は8名で教員は4名程度だった。授業の実施状況は、小学1年生から小学6年生まで合同で実施していた。1名の教員が全体への指示を出し、その他の教員が児童一人ひとりに個別指導を行うT.Tを採用していた。授業の内容は以下の通りである。

4月：体力テスト 5月：体力テスト ※6月：フロアバレーボール 7月：水泳  
※9月：ゴールボール ※10月：サウンドテーブルテニス 11月：陸上運動（走・投・跳）  
12月：器械運動（マット運動・鉄棒・平均台） 1月：グランドソフトボール・体力テスト  
2月：グランドソフトボール・体力テスト 3月：ゴールボール  
※6月、9月、10月の記憶はあいまいと語っていた。

特に印象に残っている内容は、フロアバレーボールの授業であった。小学1年生の時に小学6年生を相手に試合をしたことを挙げていた。生徒Dは「今思うと、5年先輩と本気で戦うことはなかったし、楽しかった。」と語っていた。

球技を中心に多くの種目を経験することができていたため、授業の内容に関して新しく経験したかった種目はなかった。

b) 高学年の体育について：主に小学5、6年生の頃を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週3回の実技を実施していた。児童の数は9月までが6名、10月から9名で教員の数は4名程度だった。10月から中高合同で授業を実施していた。授業の実施状況は変わらなかった。授業の内容は一部変更があった。

11月：陸上運動（持久走が追加された） 12月：器械運動（マット運動のみになった）

特に印象に残っている内容は、小学6年生の時に中学部と合同で実施したフロアバレーボールの授業であった。生徒Dは「生徒だけで6人揃ったから。前半の時はそれができなかったから嬉しかった。」と語っていた。また、「(6年生の前半は)4人だけで無理やりやればチームはできるけど、やっぱり6人でやりたいし。6人対6人で対決したかったし、3年生の時の6年生と一緒にできることも嬉しかった。」と語っていた。

高学年になるとブラインドサッカーの練習をもっとしたかったと語っていた。

### (2) 外遊びについて

a) 低学年の外遊びについて：主に小学1、2年生の頃を中心に聞き取りを行った。ほぼ毎日業間休みや昼休み、授業の合間の10分休みなどの時間を使って同級生の友達と一緒に屋内のプレイルームでトランポリンをして遊ぶことが多かった。記憶に残るような大きな怪我をすることは一度もなかった。

b) 高学年の外遊びについて：主に小学5、6年生の頃を中心に聞き取りを行った。低学年の頃と同じようにほぼ毎日トランポリンをして遊んでいた。記憶に残るような大きな怪我をすることは一度もなかった。



(3) 体育や外遊び以外（社会体育等）で体を動かす経験

a) 低学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学1、2年生の頃を中心に聞き取りを行った。ほぼ毎日、家の中でボールを使って遊んでいた。蹴る・投げるなどの運動をしていた。

b) 高学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学5、6年生の頃を中心に聞き取りを行った。生徒Dは「寄宿舎の先生と公園行って遊んだり、寄宿舎のプレイルームで野球盤のような遊びをした。」と語っていた。児童同士でルールをつくり、「寄宿舎の部屋は全部3人部屋で何となく広がったから、マウンドは貼り付けて箱にツーベースとかホームランとかを付けて立てかけたり立てたりして、ボールを投げて（転がして）バットで打つ。ちっちゃい手作りの鈴入りのボールを使ってた。」と語っていた。また、特別に中高のスポーツ部に参加させてもらい朝練習やクラブ活動の時間にスポーツを行っていた。

(4) 放課後や休日の過ごし方について

a) 低学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学1、2年生の頃を中心に聞き取りを行った。明確に覚えてはいないが、常に家の中で動いていたと語っていた。ボールで遊ぶことが多かった。

b) 高学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学5、6年生の頃を中心に聞き取りを行った。低学年の頃と同様に、家の中でできる遊びをしていた。自転車やキックボードに乗って遊ぶこともあった。また、高学年からブラインドサッカーの練習を本格的にはじめた。

(5) 全力を出し切る経験について

小学6年生の時のスポーツ部の活動の中で水泳に取り組んでいた時に全力を出し切れたと語っていた。小学6年生の時に平泳ぎで1km泳ぎ切った経験が心に残っていた。生徒Dは「適当に泳いでたら『泳げるところまで泳いでやろう。』ってなった。500(メートル)って聞こえたから1キロまで泳いでやろうって思った。」と語っていた。プールのコース数や長さなどの環境については把握していた。また、「同級生とか1個上の先輩とかにライバルとかがいなかったから、自分で架空のライバルとかを適当に作ってやってた。」と語っていた。

(6) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について

フロアバレーボールに取り組むときに「ブロックアウトになりそうなボールを横に移動して取るっていうのは得意なんじゃないかなと思う。」と語っていた。ボールに対する反応の素早さについてうまくできていると感じているようだった。生徒Dは「ボールへの反応とかが得意なんだなと思えたのは、周りの人に『それも反応するの?』って言われて。それができるようになったのは、小学4年生の時(スポーツ部に参加していた時)に、ボールを自分の横から転がして回り込んで取るって練習もしたし、ネットに打って跳ね返ってくるボールを取るって練習もした。この練習をしたから反応が良くなったと思う。」と語っていた。また、周囲のフィードバックと自己評価を照らし合わせながら、自分自身の動きについて確認を繰り返していると語っていた。

(7) 運動への意識調査

運動やスポーツをすることへの恐怖心について生徒Dは小学5年生の時にブラインドサッカーの練習中に骨折をしたことがあり「(小学5年生の時に)骨折した後は、ボールを追うときに遠いボールを取るときははじめは怖かった。今も一瞬出る時がある。」と語っている。新しい動きを教わるときにすぐに動きを理解(イメージ)できるかという問いに対して「今までの動きの応用編だから。わかるかな。聞いて『こんな感じかな』と動いてみて、先生が違うといわれたらここをもっとこうして、『あ、こうだったんだ』ってわかる。」と語っている。新しい運動やスポーツに取り組むことは楽しいと感じるかという問いに対して「新しい動きを知れるのは良いこと。それが自分にとって全然できなかったとしたら前のやり方にしようと思うけど、(頭の中でずっと)できるようになりたいと思う。」と語っていた。

## 第6節 生徒Eの調査結果

### (1) 体育について

a) 低学年の体育について：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週3回実技を実施していた。授業の実施状況は、児童の数は同級生6名で教員は4名程度だった。週に1回上下の学年と合同で実施していた。重複学級の児童も合同で実施していた。1名の教員が全体への指示を出し、その他の教員が児童一人ひとりに個別指導を行うT.Tを採用していた。授業の内容は以下の通りである。

4月：体力テスト・体づくり運動	5月：陸上運動（走・跳）	6月：ボール運動（転がす・キャッチなど）	フロアバレーボール	7月：体づくり運動・水泳
9月：水泳	10月：体づくり運動	11月：自転車	12月：マット運動	
1月：ローラースケート	2月：陸上運動（走・マラソン）	3月：ボール運動（蹴る・打つなど）		

特に印象に残っている内容は、フロアバレーボールの授業であった。生徒Eは「先生に打つのが強いと褒められたり、打ち合いがすごく楽しかったのを覚えています。褒められると嬉しくてもっと頑張ろうと思う。」と語っていた。

ブラインドサッカーの練習をすることが少なかったため、もっとやりたかったと語っていた。

b) 高学年の体育について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。授業には全部参加していた。週3回実技を実施していた。授業の実施状況は、児童の数は同級生が5人でその他は低学年と同様だった。授業の内容も変更がなかった。

特に印象に残っている内容は、フロアバレーボールの授業であった。生徒Eは「さっきのバレーのことだと友達が結構強くなったりして、あとは指示の出し合いができるようになったりパスができるようになったりしてきて面白くなってきた。」と語っていた。

### (2) 外遊びについて

a) 低学年の外遊びについて：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。毎日昼休みの時間に友達や教員と一緒に屋内のプレイルームで野球をして遊ぶことが多かったと語っていた。生徒Eは「プラスチックのバットがあったからそれで野球をやった。誰かに投げてもらって、打って。走ったりできないから3秒以内に獲ったらアウトとかでやった。」と語っていた。ボールは音の鳴るボールを使用し、転がしてもらったボールをプラスチックのバットで打っていた。

b) 高学年の外遊びについて：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。週3回くらい友達や教員と一緒にグラウンドでサッカーやソフトボール投げをして遊ぶことが多かった。

(3) 体育や外遊び以外（社会体育等）で体を動かす経験

a) 低学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。低学年では体育や外遊び以外で体を動かす機会は無かった。

b) 高学年の体育や外遊び以外で体を動かす経験について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。2週間に1回開催される学外のランニングクラブに参加していた。ランニングクラブでは「2ヶ月に1回くらい大会みたいなのがあって、それに向けて練習してた。100mの練習をしてた。」と語っていた。

(4) 放課後や休日の過ごし方について

a) 低学年の放課後や休日の過ごし方について：主に1、2年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。放課後は運動やスポーツをする機会が無かったが、休日は月1回程度公園でブラインドサッカーをすることがあった。

b) 高学年の放課後や休日の過ごし方について：主に小学5、6年生の頃の経験を中心に聞き取りを行った。高学年では放課後や休日を使って運動やスポーツをすることは無かった。

(5) 全力を出し切る経験について

小学5、6年生の時のランニングクラブの活動で全力を出し切れたと語っていた。生徒Eは「ランニングクラブの大会で記録があがったとき。」に全力を出し切れたと感じており、低学年の頃は「走るのには（走る方向に）物があるんじゃないかと思っちゃって全力を出せないことがあった。」と語っており、高学年になってからその不安を取り除くことができたと感じていた。その背景には、小学4年生から一人で帰宅する練習をはじめ、徐々に一人で歩くことへの自信をつけていったことがあった。また、100m走では介添えで走る伴走者もおり「（全力を出せたのは）伴走してくれた人と（4年間指導してくれた）コーチがいてくれたから。」とも語っていた。

(6) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について

陸上運動の立ち幅跳びの時間で重心の移動でこの経験をした。小学部の6年間を通して練習を行い、「最初は重心の移動とか言われてもよくわかんなかったけど、『こういうことなのかな』と思った時にやってみたらよくわかった。」と語っていた。生徒Eが実感した感覚を言葉にすると「風を切る感じがわかった時。」と語っていた。

(7) 運動への意識調査

運動やスポーツをするときに恐怖心はない。新しい運動やスポーツを教わる時にすぐに動きを理解（イメージ）できるかという問いに対し「できることとできないことがある。前やってた動きが間違っていたり、今の方法と違うことを教わった時にどうしても元の方法が離れなくて『どうしたことなんだろう』となる時はある。」と語っていた。新しい方法を取り入れることで感じることはあるかという問いに対し「はい。前の方法を変えるのは難しいなと思うこともあるけど、この方法の方が良かったなと思うこともある。」と語っていた。新しい運動やスポーツに取り組むことは楽しいかという問いに対しては楽しいと感じると回答していた。

## 第7節 各生徒の調査結果のまとめ

各生徒の調査を項目ごとにまとめる。

### (1) 体育について

体育に関する聞き取りの結果を表7にまとめた。表7は授業で実施していた種目をまとめたものである。「○」は実施していた種目、「△」は聞き取りの中であいまいに答えていたものである。空欄は実施していない種目である。

表7. 体育実技で実施していた種目一覧

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
体づくり運動	○		○		○
マット運動	○	○	○	○	○
鉄棒運動	○	○	○	○	
跳び箱運動	○	○	○		
短距離走	△	△	○	○	○
持久走(長距離走)	○	○	△	○	○
立・走幅跳び	△	△	○	○	○
ボール投げ	△	△	△	○	○
水泳	○	○	○	○	○
ゴールボール				○	
ブラインドサッカー				△	○
フロアバレーボール	○	○	○	○	○
サウンドテーブルテニス			○		
グラウンドソフトボール				○	△
表現運動		△			
ローラーブレード・スケート			○		○
自転車	△				○
体力テスト	○	○	○	○	○

全ての生徒がT.Tで指導を受けていた。5名中4名の生徒が小学1年生から小学6年生まで合同で授業を受けており、1名の生徒が上下の学年と合同で授業を受けていた。知的障害や肢体不自由を併せ有する児童と合同で授業を受けていた生徒が1名いた。内容に関しては、マット運動、陸上運動、水泳、フロアバレーボール、体力テストは全ての生徒が経験していた。

### (2) 外遊びについて

外遊びに関する聞き取りの結果から、遊んでいた内容を表8に、低学年の頃の頻度を表9、高学年の頃を表10にまとめた。

表8. 外遊びの内容

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
鬼ごっこ	○	○			
トランポリン				○	
固定遊具(ブランコ・ジャングルジム等)			○		
野球					○
ソフトボール投げ					○
ブラインドサッカー					○

表 9. 低学年の頃の外遊びの頻度

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
毎日	○			○	○
週 2～3		○	○		
なし					

表 10. 高学年の頃の外遊びの頻度

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
毎日	○	○		○	
週 2～3					○
なし			○		

外遊びの内容は主に、鬼ごっこ、トランポリン、固定遊具(箱型ブランコ、ジャングルジム)を使った遊び、ボール遊びであった。業間休みや昼休み、帰宅前の時間を使って遊んでいた。友達や教師と一緒に遊ぶことが多く、一人で遊ぶことはなかった。各生徒とも外遊びを通じて大きな怪我をすることはなく、小さな怪我をすることはあったが遊ぶことが嫌になることはなかった。

(3) 体育や外遊び以外(社会体育等)で体を動かす経験について

体育や外遊び以外(社会体育等)で体を動かす経験に関する聞き取りの結果から、低学年の頃の頻度を表 11、高学年の頃を表 12 にまとめた。

表 11. 低学年の頃の社会体育等で体を動かす頻度

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
毎日				○	
週 2～3			○		
月 1・2					
2週間		○			
なし	○				○

表 12. 高学年の頃の社会体育等で体を動かす頻度

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
毎日				○	
週 2～3					
月 1・2	○				○
2週間		○			
なし			○		

毎日、体を動かす時間を持っていた生徒は生徒 D のみであった。低学年の頃に体を動かす機会がなかった生徒は 2 名、高学年の頃は 1 名だった。

内容に関しては各自で異なっており、「学校などで開催される視覚障害者用スポーツの体験会やクラブ活動に参加する、学校で開催される運動教室に参加する、寄宿舎で友達や教員と一緒に運動する、家族と近所の公園などに出かけて運動する、家の中で運動する」などであった。各生徒ともある程度決まった場所、良く知っている場所で運動をしていた。

(4) 放課後や休日の過ごし方について

放課後や休日を使って体を動かす経験に関する聞き取りの結果から、低学年の頃の頻度を表 13、高学年の頃を表 14 にまとめた。

表 13. 低学年の頃の放課後や休日を使って体を動かす頻度

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
毎日				○	
週 1					
月 1					○
年数回					
なし	○	○	○		

表 14. 高学年の頃の放課後や休日を使って体を動かす頻度

	生徒A	生徒B	生徒C	生徒D	生徒E
毎日				○	
週 1		○			
月 1					
年数回			○		
なし	○				○

毎日、体を動かす時間を持っていた生徒は生徒 D のみであった。低学年の頃に体を動かす機会がなかった生徒は 3 名、高学年の頃は 2 名だった。放課後や休日を使って運動する機会がなかった生徒もいたが、それらの生徒は運動遊びがしたいと思っていたが、家庭の事情などで一緒に遊ぶ人がおらず遊ぶことができなかったことが原因の一つとして挙げられるようだった。

内容に関しては各自で異なっており、「寄宿舎で友達や教員と一緒に運動する、施設に出かけて運動する、家の中で運動遊びをする、家の周りで運動遊びをする」などであった。

(5) 全力を出し切る経験について

各生徒の聞き取りから、全力を出し切る経験について以下のような結果が得られた。

視覚に障害のある子どもは晴眼児に比べて全力を出し切る経験が乏しいことは先行研究が示しているが、聞き取りを行った生徒は全員がこの経験をしたことがあった。

各自の聞き取りで共通していた部分は、「良く知っている環境であること」、「見守る大人がいること」、「課題に挑戦すること」であった。環境に関しては、普段体育実技などで使用している施設内で活動しており、物の場所や音の反響の仕方など、いつも通りに体を動かせるということが重要であることがわかる。環境を理解していることは、安全に運動できることがわかっていることにも繋がる。また、活動場所に子どもを見守る大人がいたことも共通していた。



(6) 「わかった」「できた」の積み重ねの経験について

各生徒の聞き取りから、「わかった」「できた」の積み重ねの経験について以下のような結果が得られた。

各自に共通していた部分は、「ポイントを意識すること」、「繰り返し、段階的に練習をすること」、「周囲のフィードバックを受けること」であった。ポイントを意識することに関しては、ポイントとして指導されたことを意識しながら試技を繰り返すことで感覚と結果が結びついたときに理解できたと感じるようであった。これらはすべて、繰り返し練習しながら段階的に取り組むことで理解を積み重ねることができたことも重要な点である。さらに、周囲の指導者などが一回の試技に対してフィードバックを行い、動きがどのようになっているかを伝えることでイメージを作ることに繋がっているようであった。

(7) 運動への意識調査について

各生徒の聞き取りから以下のような結果が得られた。

運動やスポーツをすることに恐怖心を抱いている生徒はいなかった。これは、授業などで大きな怪我を経験することがなかったことが要因であろう。新しい動きをイメージするためには指導された動きを実際に行うことで理解をしていくことが共通していた。これも、これまで述べられていたように繰り返し練習することや指導者などのフィードバックを受けてイメージを作っていくようである。新しい動きに対しては意欲的に取り組みたいという回答が多かった。中には難しさを感じる生徒もいたが、過去の経験と結びつけて課題を解決していこうとする姿勢が見られた。

(8) まとめ

聞き取り調査の結果から①児童期の比較的低学年から多種多様な運動・スポーツに親しみ、全身を使った運動を経験してきた生徒ほど身のこなしが滑らかであること②用具(ボールなど)を使って遊ぶことが多かった生徒ほど身のこなしが滑らかであること③動作を丁寧に理解し、繰り返し練習する経験をしてきた生徒ほど身のこなしが滑らかであることがわかった。

## 第6章 考察

### 第1節 視覚に障害のある子どもの身のこなしを高める運動

ここまで、視覚に障害のある生徒に対する聞き取り調査をもとに、視覚障害児の身のこなしのぎこちなさについて整理をしてきた。各生徒とも、発育・発達環境が異なり、経験してきた運動やスポーツに違いはあるが、比較的、運動能力が高く、動きの理解力も高い生徒Dは多種多様な運動やスポーツを経験し、かつ、遊ぶ頻度もほぼ毎日であった。このように、質、量ともに十分に確保されている生徒は、身のこなしが滑らかであり、自身の感覚を理解できていることがわかる。

反面、視覚障害児の中には中学・高校年代になっても「力み」や「ぎこちなさ」が残る生徒がいる。その背景には、何らかの理由で幼児期や児童期などの発育初期に経験すべき遊びや運動を基本的な運動を獲得することなく進学してしまっている可能性がある。つまり、幼児期から動きの根幹を成す経験をしておらず、抜け落ちていることが考えられる。そのため、何らかの理由でその時期に経験することのなかった動きを補うことなく発育してしまうと、中学・高校年代になっても身のこなしのぎこちなさが残ることが考えられる。それらを改善するためには、体をバランスよく発達させるために「体幹と手や足を協応させながら行う運動を経験させること」、「意図的に不安定な体勢を作ってバランスを保つ運動を経験させること」、「ボールなどの用具を操作して自分と異なる物に動きを併せる運動を経験させること」が必要であると考えられる。

以上のことから、聞き取り調査結果ならびにコーディネーション運動の考え方<sup>15)16)</sup>と幼児期運動指針<sup>20)</sup>を援用しながら視覚に障害のある子どもの身のこなしのぎこちなさを改善するために必要と考えられる運動を下記の三つの項目に分けて考える。

なお、幼児期運動指針の中で分類されている基本的な動きから聞き取り内容をもとに、視覚に障害のある子どもが不足していると考えられる運動を抽出した。

#### (1) 手足を協応させながら全身を使う運動

「体を移動する動き」の歩く、走る、跳ぶ、這うなどの動きを参考にする。

a) 熊歩き：両手足を着いて四つ這いになり、膝を軽く曲げて前に進む。進み方は、「右手と左足、左手と右足」を連動させて進む、「右手と右足、左手と左足」を連動させて進むなどのバリエーションがある。また、慣れてきたら後ろに進む。この運動は、コーディネーション能力のうち「定位能力」、「連結能力」を向上させる。

b) クモ歩き：仰向けの状態で、両手足で体を支え後ろに進む。進み方は、進み方は、「右手と左足、左手と右足」を連動させて進む、「右手と右足、左手と左足」を連動させて進むなどのバリエーションがある。また、慣れてきたら後ろに進む、腹の上に物を乗せて進む。この運動は「定位能力」、「バランス能力」を向上させる。

c) 木馬ジャンプ：膝と腕を伸ばして四つ這いになる。その場で、手足同時に跳ねる。バリエーションとして、同時に跳ねながら前後左右に一歩移動する。さらに、指示を聞いて前後左右に動く。この運動は「連結能力」、「リズム能力」を向上する。

d) アザラシ歩き：腕立て伏せのように手を着き、足は力を抜いて両手を交互に着きながら前へ進む。この運動は「連結能力」、「バランス能力」を向上させる。

e) 手押し車：腕立て伏せの姿勢で両足をもってもらい、腕で前へ進む。バリエーション

ョンとして、速度を上げる、前後左右に動く。足の高さを変えることも有効である。この運動は「リズム能力」、「バランス能力」を向上させる。

f) 両足跳び：手を大きく上に振り上げ、両足でジャンプして、両足同時に膝を曲げながら着地する。この運動は「連結能力」、「リズム能力」を向上させる。

g) バービー運動：気をつけの姿勢から、①しゃがむ②腕立ての姿勢③しゃがむに戻る④気をつけに戻る、の4つの体勢を素早く切り替える。この運動は「変換能力」、「リズム能力」を向上させる。

h) 棒のぼりおり：2本の縦に伸びた棒を右手と左手でそれぞれ持ち、体の反動を使って片手ずつずらしながら登る。バリエーションとして、片方ずつずらしながら降りる。この運動は「連結能力」、「リズム能力」を向上させる。

## (2) バランス感覚を養う運動

「体のバランスをとる動き」の立つ、座る、回る、転がるなどの動きを参考にする。

a) かかしバランス：両腕を水平に伸ばし、片足立ちになって一定時間バランスをとる。バリエーションとして、上げる足の膝の高さを変える、不安定な状態（支持脚の下にバランスディスクを置くなど）でバランスをとる、つま先立ちになる。この運動は「連結能力」、「バランス能力」を向上させる。

b) 片足バランス相撲：2人1組で向かい合って手をつなぎ、引き合ったり、押し合ったりしながら相手のバランスを崩す。バランスを崩して両足を着いたり、倒れたりしたら負け。この運動は「バランス能力」を向上させる。

c) バランス遊び：両手足を着いた状態から、片手、片足を上げ、倒れないようにバランスをとる。例えば、「右手と左足」を上げるなどである。この運動は「連結能力」、「バランス能力」を向上させる。

d) 正座でジャンプ：正座の状態で座り、腕を背中側から前方へ振った反動でジャンプをして立ち上がる。この運動は「変換能力」、「リズム能力」を向上させる。

e) ケンケンパー：片足立ちの状態で前に進む。バリエーションとして、前後左右に進む、「ケン」の足を交互にする、リズムのパターンを決めて行う（例えば、「ケンケンパー・ケンパーケンパーケンケンパー」など）。この運動は「変換能力」、「リズム能力」を向上させる。

## (3) ボールを使う運動

ボールを使う運動はすべて、段階的に指導を行う。自分の体を操作するだけでなく、ボールを操作しなければならないため、はじめは簡単な動きから始め、徐々に手足を連結させる動きを入れたり、捻りを加えたりして動きを複雑化させていく。また、ボールは子どもの発達段階に合わせて、大きさや音の有り無し、重さなどを変える必要がある。

聞き取りから、視覚に障害のある子どもに不足しているボールを使った運動として「転がす」、「投げる」、「捕る」、「よける」、「蹴る」、「運ぶ」が挙げられる。

例えば、「転がす」では、①両足を左右に肩幅くらい開き、両手でボールを持って前方向に転がす②①と同じような体勢から後ろ方向に転がす③足を前後に開き、両手でボールを持って体の横からボールを転がす④③と同じような体勢で、片手でボール

を持って転がす⑤後ろから助走をつけて③や④の体勢になり転がすなど、段階を踏んで徐々に動きを大きくしていく。

なお、視覚に障害のある子どもは「投げる」動作が苦手といわれており、指導の効果が得られにくいことがさまざまな文献が示している<sup>5)9)10)14)</sup>。指導の際も、段階を意識しながら子どもの実態に則した声掛けを行いたい。

上記のボールを使う運動は、他者と触れ合いながら実施することも可能である。例えば、「転がす」と「捕る」、「よける」を掛け合わせて転がしドッジボールを行ったり、「転がす」を「蹴る」に変えて行ったりすることができる。その際、安全面の配慮を欠かしてはならない。

視覚に障害がある子どもに経験させたい運動を上記に示した。聞き取り調査でこれらの運動の経験の有無などを確認するまでには至っていないが、体育や外遊びの時間、放課後や休日の時間を使ってこれらの運動に親しむ機会を増やすことが重要であることが考えられる。

また、これらの運動を取り組ませるにあたり、個々が運動に集中しながら自身の体の動きに向き合い、全力を出し切れる環境を設定する必要がある。聞き取り調査結果を参考に、運動を行う場所を頻繁に変えないこと、安全な場所であることを理解させること、指導者や保護者が見守ること、指導の場合は段階的指導を心掛けることなど、子どもが安心して全身を自由に動かせる環境を設定する必要があることが必要であるだろう。

## 第7章 結論

### 第1節 結果

本研究は視覚に障害のある中学生に対し、児童期の運動やスポーツ活動経験の質・量などに関する聞き取り調査を行い、身のこなしのぎこちなさとの関連を検討し、身のこなしのぎこちなさがある生徒に対する個の実態に合わせた指導法の開発を目的とし、以下の結論を導いた。

聞き取り調査の結果から、①児童期の比較的低学年から多種多様な運動・スポーツに親しみ、全身を使った運動を経験してきた生徒ほど身のこなしが滑らかであること②用具(ボールなど)を使って遊ぶことが多かった生徒ほど身のこなしが滑らかであること③動作を丁寧に理解し、繰り返し練習する経験をしてきた生徒ほど身のこなしが滑らかであることがわかった。

上記を受けて、視覚に障害がある身のこなしのぎこちなさが残る子どもに対して推奨したい運動として、①手足を協応させながら全身を使う運動②バランス感覚を養う運動③用具(ボールなど)を使う運動を挙げた。

### 第2節 今後の課題

本研究では視覚に障害のある生徒に対し、児童期の運動やスポーツ経験についての聞き取り調査を実施し、個々の課題について検討を行った。しかし、これらの結果は個の実態について調査した結果であり、視覚に障害のある子ども全般に通じる結論であるかは疑問である。今後、本研究で示した運動を生徒へ実施し、運動能力や日常生活動作の向上に効果があるか検証する必要がある。

また、本研究では生徒のみへ聞き取り調査を実施したが、指導されてきた内容が不明瞭であること、家庭の支援状況を聞き取れていないことなど、視覚に障害のある子どもを取り巻く支援者への聞き取りを行っておらず、これらに関する文献数も乏しい。今後、本研究で得られた結果をもとに、聞き取り調査を実施した生徒に対して指導、支援を行っていた者への聞き取り調査を実施する必要があるだろう。

## 引用・参考文献

- 1) Adelsen, E., & Fraiberg, S. (1974), Gross motor development in infants blind from birth. *Child development*, 45, pp225-236
- 2) Tanaka, M. & Ishikawa, T. (1979), Gross motor development in congenitally blind infants. *Bulletin of the Tokyo Metropolitan Rehabilitation Center for the Physically and Mentally Handicapped*, pp83-93
- 3) 五十嵐信敬ほか(1970), 未熟児網膜症児の身体発達について, 東京都心身障害者福祉センター研究報告集, 1, pp45-50
- 4) 五十嵐信敬(1993), 視覚障害幼児の体育指導に関する実践的研究—指導効果の考察を中心に—, *心身障害学研究* 17, pp1-10
- 5) 五十嵐信敬(1998), 視覚障害幼児の発達と指導, 東京都, 株式会社コレール社, pp14-18, pp28-33, pp132-134
- 6) 香田泰子(1994), 本学視覚部学生の体力や運動経験—障害の程度や出身校からみた検討—, *筑波技術短期大学テクノレポート*, 1, pp42-44
- 7) 香田泰子(2009), わが国における視覚障害者のスポーツ活動の現状と課題, *障害者スポーツ科学*, 7(1), pp3-11
- 8) 佐瀬一夫編(1979), 視覚障害と遊び-遊びの本質と視覚障害者のスポーツ, 東京都, ひまわり出版株式会社, pp96-105
- 9) 佐藤泰正編(1996), 視覚障害学入門, 東京都, 学芸図書株式会社, pp7-10, pp37-44
- 10) 佐藤泰正編(1996), 視覚障害心理学, 東京都, 学芸図書株式会社, pp9-18, pp145-154
- 11) 佐藤泰正・中田英雄(1977), 視覚障害児の身体発育特性, *東京教育大学教育学部紀要*, 23, 87-91
- 12) 鈴木和明・五十嵐信敬(1971), 盲幼児の行動発達について, *盲心理研究*, 17, 33-42
- 13) 全国盲学校長会編(2016), 視覚障害教育の現状と課題, 東京都, 鶴川印刷株式会社, 55, p8
- 14) 多和田浩一(1996), 視覚障害児(者)における基本的運動能力の獲得について, 平成8年度岐阜大学大学院修士論文, pp29-44
- 15) 東根明人編(2007), 子どものつまずきがみるみる解決するコーディネーション運動-器械運動編-, 東京都, 藤原印刷株式会社, pp9-13, p18, pp28-29, p38, p41, p50, p64, p66, p74, p88
- 16) 東根明人編(2007), 子どものつまずきがみるみる解決するコーディネーション運動-器械運動編-, 東京都, 藤原印刷株式会社, p71
- 17) 中田英雄(1982), 視覚障害児の反応時間の発達特性, 第1回日本障害児・者体育研究発表大会大会号, 23
- 18) 中田英雄・谷村裕・佐藤泰正(1980), 視覚障害児の運動機能の発達特性, *視覚障害教育・心理研究*, 2(1), pp1-10
- 19) 原田清生(2016), [2]個別の障害に関する基礎知識と指導上の配慮事項 ②視覚障害, 後藤邦夫編, 特別支援時代の体育・スポーツ-動きを引き出す教材 80-, 東京都, 株式会社大修館書籍, pp30-36
- 20) 文部科学省(2012), 幼児期運動指針ガイドブック, pp8-16, pp47-51

- 21) 山本夏幹(2016), ⑤体育:ブラインドサッカーの導入期における段階的指導について(1)-基礎的・基本的な技術指導を中心に-, 筑波大学附属視覚特別支援学校 視覚障害教育ブックレット編集委員会編, 視覚障害教育ブックレット, Vol. 31, pp38-44
- 22) 山本夏幹(2016), ④体育:ブラインドサッカーの導入期における段階的指導について(2)-基礎的・基本的な技術指導を中心に-, 筑波大学附属視覚特別支援学校 視覚障害教育ブックレット編集委員会編, 視覚障害教育ブックレット, Vol. 32, pp36-41
- 23) 山本裕子・岩田圭子(1971), 0歳盲児の発達について, 東京都心身障害者福祉センター研究報告集, 2, pp1-8

## 英文要約

### 【Introduction】

Tokyo has been chosen to host the 2020 Olympic and Paralympic Games. This incident raised public interest in sports. In particular, I have the impression that the exposure of para-sports information increased. However, the number of visually impaired children is decreasing.

On the other hand, when I teach children with visual impairment, I often feel the clumsiness of the movement from them. In contrast to the increasing the interest in public, the process that we find an athlete and raise from a limited number of children is not easy.

It is good not only for fostering excellent athletes but also for all visually impaired children, to examine the clumsiness of exercise and sports activity experience and movement of children with visually impaired. It improves the quality of life by improving the performance of the body and it becomes the opportunity for himself to act actively in everyday life.

### 【Purpose】

The goal of this study was to explore a connection between quality and quantity of sports and exercise experience and the clumsiness of the movement. For that reason I did interview survey with middle school student who has visual impairment. I am going to analyze what the cause is of the clumsiness of the movement that I felt from students with visual impairment.

Furthermore I would like to introduce this interview survey to the development of teaching methods adjusted to the actual state of an individual student who is awkward in his movements.

### 【Methods】

In November 2016, I did interview survey with middle school student who is enrolled in Special Needs Education School for the Visually Impaired. I was targeted to five blind students (3 boys and 2 girls) for the survey. The content of the survey is the quality and quantity of childhood exercise and sports activity experience. Specifically, it is about experiences of physical education and outdoor play in childhood, how to spend holidays, and so on. Based on interviews, I evaluated the clumsiness of the movement from five viewpoints "balance, agility, motor skill, coordination, flexibility".

### 【Results】

Based on the student's exercise and sports experience in childhood, I evaluated the current thoroughfare. Regarding the content of physical education, there was not much difference in what each student had experienced. Regarding play, some



students actively played with their bodies, but some students had less chance to play when it comes to the upper grades. Regarding after school, holidays, activities outside the school, students who received cooperation from parents and instructors were actively active. The environment where you can do your best and the place where you know well and the advice of the leader who will assist will be factors to promote understanding of how to use the body.

#### **【Discussion】**

From the results of interviews and evaluation of each student's body movements, I examined an exercise program to improve.

#### **【Conclusion】**

I was led to the following conclusions from the interview survey.

[Characteristic of who have a graceful movement]

- ① Having experienced various exercises, sports, whole body exercise from lower grade
- ② Used to play with tools, e.g. balls.
- ③ Having experienced to understand body movements carefully and practice repeatedly

[Exercise program to improve the action of the body]

- ① Movement to use the whole body with coordinate the movements of the hands and feet
- ② Movement to development of a sense of physical balance
- ③ Movement using sporting goods (ball, etc.).